

クラーク博士と教育精神(3)

—クラーク博士の東京滞在と札幌への航海—

秋林幸男(本会理事)

クラーク博士の一行は、1876(明治9)年6月29日に横浜に上陸してホテルで休んでいたところ、マサチューセッツ農科大学出身の堀誠太郎と開拓使の官吏が迎えに来て、横浜-新橋間の鉄道で東京に向かった。築地精養軒で旅装を解き、その後約1ヶ月間、東京に滞在した。



「横浜海岸鉄道蒸気車図」歌川広重(三代)画明治7年(1874)刊か、
出典：東京都立図書館デジタルミュージアム library.metro.tokyo.lg.jp/

滞在当初は、開拓使長官黒田清隆との公式会見や開拓使長官主催の歓迎会に出席し、前アメリカ公使の森有礼や開拓使の役人とも会見した。マサチューセッツ農科大学留学中の上杉勝賢(かつよし)の家族(旧米沢藩主家)による歓待を受け、7月4日にはアメリカ大使館主催のアメリカの独立記念日祝賀会に参列し、その後、東京滞在中に札幌農学校での教育に関連する事にかかわった。

第一には、開拓使は札幌農学校に入学する学生の確保は東京の開拓使仮学校から移転した札幌学校からの学生だけでは足りず、同じ官立学校で文部省管轄の東京英語学校と開成学校の学生から確保することになった。クラーク博士たち一行は7月5日と11日に文部省の所管であった開成学校と東京英語学校の学生15名に口頭試問を実施し、開成学校から2名、東京英語学校から9名を合格とし、この11名は7月25日にクラーク博士一行とともに開拓使の用船である玄武丸で北海道に渡った。

第二には、黒田清隆から道德教育を依頼されてクラーク博士が教育に利用した聖書について、一期生の大島正健は「携行された荷物に…英語聖書が既に

数十冊秘められてあった」といい、二期生の内村鑑三は「クラークが日本に上陸するや否や、直に聖書会社に行いて五十冊の英語聖書を買求めた」という。しかし、太田雄三の『クラークの一年』でのクラーク博士の家族や知人たちへの手紙の分析によれば、クラーク博士が来日する前年からアメリカ聖書協会の極東担当の代理人として横浜で活動していたルーサー・H・ギュリックに7月20日に会い、「札幌の私の生徒用にと英語聖書三十冊」をもらったという。そして、黒田清隆からの聖書利用の黙認によって、クラーク博士は10月ころから聖書を一期生に配って、道德教育を開始した。

シーボルトの *Flora japonica*(「日本植物誌」)が横浜で売り出されていることを知り、7月8日にそれを購入するために横浜に行っている。7月13日には、1684年に幕府によって「小石川御薬園」として創設され1877年から東大が管理することになる小石川植物園を訪れた。翌日には植物学者伊藤圭介を招いて食事をともにし、クラーク博士は専門分野の植物学の知見を広めようとした。このほかに、両国の花火大会などの東京見学のほかに開成学校、東京書籍館、内務省の新宿試験場、東京博物館、工学寮、下総の牧羊場や種畜場などを視察して東京の約一ヶ月を過ごした。

7月25日にクラーク博士一行は、黒田清隆と11名の選抜された学生、そして、開拓使諸工場の募集に応じて北海道に行くという女工たちと玄武丸に乗り合わせて品川を出航した。この航海中に学生たちが騒いだために黒田長官が激怒してクラーク博士に道德教育を要請したといわれるが、クラーク博士の手紙では触れられていない。27日の真夜中に函館港に投錨してクラーク博士一行はマサチューセッツ農科大学卒業生の湯地定基が場長を務める開拓使の七重勸業場を視察し、29日に函館を出港した。小樽に向かう途中、30日に祝津で黒田清隆が引き起こした誤砲事件を目撃した後、小樽で上陸して7月31日の早朝に小樽を馬で立ち、昼前に札幌の宿舎(旧本陣)に着いた。同行していた学生たちは小樽で漁船に乗り換えて銭函で上陸して札幌に馬で向かった。